概要

早稲田大学政治経済学部国際政治学科

栗原彩夏

本論文は、東日本大震災とメディア報道を大テーマとし、初期報道と 5 年目の報道との比較を通して災害報道の実態を明らかにするためのものである。東日本大震災は 2011 年 3 月 11 日に東北地方で発生した、日本における観測史上最大の震災であった。この震災が発生した際、筆者は父の海外赴任に伴いアメリカで生活をしており、異国の地で震災の発生を知ることとなった。遠く離れた地域にも情報を迅速に伝えることができる報道の力、映像の力を強く感じた。論文を通し、「5 年目の東日本大震災の報道は、震災当初の報道でみられた問題点を改善できていたか」、また「震災から 5 年経った今、各番組が復興をどのような視点で捉え、報道しているのか」について共通点と相違点を考察するという 2 つの問いをたてた。まず、先行文献を読み、災害報道の定義と変遷、災害時におけるテレビ報道の重要性や指摘される問題点について述べた。災害報道の問題点として「横並び」、「報道格差」、「中央中心主義」を重点的に取り上げた。その上で、東日本大震災の概要を述べ、東日本大震災の報道でみられた災害報道の問題を論じた。次に、筆者が実際に行った映像分析の結果をまとめた。NHK 放送文化研究所が行った「東日本大震災　発生から 72 時間　テレビが伝えた情報の推移～在京 3 局の報道内容分析から～」を参考にし、映像分析を行った。先行文献を参考に、「基本画面」、「伝えた内容」、「伝えた地域」、「表示されているテロップ」等の項目をまとめたコーディングシートを作成し、2016 年 3 月 11 日に放送された 6 番組を分析の対象とした。分析の結果、5 年目の報道と 2011 年の初期報道では、取り上げられた地域がほぼ変わらないことが分かった。さらに、分析から考える全体の傾向、各番組の傾向をまとめ、全体を通しての考察を行った。本論文を通して少しでも多くの人が災害報道の可能性、東日本大震災の復興について考えるきっかけになれば幸いである。